

特別企画・シンポジウム「身体性を基軸とした日米のダンス教育を観る」

デボラ・ダマスト（ニューヨーク大学）

Deborah Damast

米国におけるクリエイティブ・ダンス：過去・現在・未来 “Creative Dance in the United States: Past, Present, and Future”

本発表では、社会性と情動の学習（SEL）と創造的なダンス教育との接点を探り、米国におけるダンス教育の変遷をたどりながら、創造的なダンス・カリキュラムの中に SEL の原則を統合することを提唱する。歴史的に米国のダンス教育は、創造的な表現、運動技能の発達、個人の選択を重視してきたが、SEL が生徒の情緒的・社会的成長にもたらす総合的な恩恵は見過ごされがちであった。近年、教師たちは、子どもたちが不安やストレスのレベルを高め、対処能力を欠いていることを発見している。

発表者は、CASEL（Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning：学問的・社会的・情緒的学習のための協働）の枠組みを用いて、自己認識、自己管理、社会的認識、人間関係スキル、責任ある意思決定などの能力を、創造的なダンス指導にどのように組み込むことができるかを紹介する。意図的に SEL を取り入れた実践を通して、創造的なダンスは、生徒にダンスのスキルだけでなく、共感力、回復力、協調性を育む重要なライフスキルを身につけさせ、変容をもたらすツールとなりうる。

This presentation explores the intersection of social-emotional learning (SEL) and creative dance education, tracing the evolution of dance education in the United States and advocating for the integration of SEL principles within creative dance curricula. Historically, dance education in the U.S. has emphasized creative expression, motor skill development, and individual choice, yet often overlooks the holistic benefits that SEL can bring to students' emotional and social growth. In recent years, teachers are finding that children have heightened levels of anxiety, stress, and lack of coping skills. Using the CASEL (Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning) framework, this presentation highlights how competencies such as self-awareness, self-management, social awareness, relationship skills, and responsible decision-making can be embedded into creative dance instruction. Through intentional SEL-infused practices, creative dance can become a transformative tool, equipping students not only with dance skills but also with vital life skills that foster empathy, resilience, and collaboration.

自己紹介：ニューヨーク大学スタインハート校のプログラム・ディレクター兼ダンス教育課程専攻准教授。NYSDEA（New York State Dance Education Association：ニューヨーク州ダンス教育協会）の前会長であり、アメリカ国内はもとより、ウガンダ、韓国、日本、中国、イタリアなど国際的な会議や公演で発表している。Center for Ballet and the Arts の 2024-2025 年度フェローとして、ダンスを通して体現されるリーダーシップに焦点をあてている。

高橋和子（静岡産業大学）

Kazuko Takahashi

日本の学校ダンスを身体性と表現性から観る
“Exploring Japanese School Dance through Embodiment and Expressiveness”

日本の戦後（1947年～）の学校ダンスは、文部（科学）省学習指導要領の教科「（保健）体育」に「創作ダンス・フォークダンス」を位置づけ発展してきた。1965年前後の体育学会のシンポジウムでは「ダンスは体育か芸術か」が二度ほどテーマになったが、ダンスの学習法が定着し保健体育科で教え続けられている。1989年には「ダンスは女子、武道は男子」という性差による履修も、家庭科より10年遅れて撤廃された。1998年には「体操」に変わり「体づくり運動（体ほぐしの運動）」が小学校・中学校・高等学校で必修になり、心と体を一体として捉える象徴ともいえる領域が導入された。ダンス領域のウォームアップでは、心も体もほぐす必要があった為、「体ほぐしの運動」の方法や内容に精通していたダンス関係者が多かったことから、ダンス指導者は「体ほぐしの運動」教材を提供し重宝がられたことがある。2008年には中学2年生までダンスも含め全運動領域が男女必修になったことにより、ダンスは「表現系・リズム系・フォークダンス系」から選択することになり、現在に至っている。このように学習指導要領の内容にダンスは位置づいてはいるものの、その扱いは「学校行事（運動会・体育祭）」等で「見せるダンス」が多く、他の運動領域と比べ、単元を組んで習得する内容を明示している学校が少ない現状がある。

ダンスは身体という素材を駆使し、動きやイメージを表現する為、かつては「踊り方の技術」の習得を目的にした「基本の運動」（屈伸・拳振・ずらす・解緊・緊張運動：江口隆哉 1954,1959）や舞踊身体育成法（邦正美）が考案され、教員養成系大学に影響を与えていた。また、松本千代栄らは1985年前後には課題解決学習を確立し、個と集団の自発性の中に「踊り・創り・みる」全体験が行われ、学習指導要領にも採用されてきた。

シンポジウムの前半では、上記の日本のダンス教育が、米国・英国・ドイツなどに比べ、独自の歴史や位置づけや特徴を持っていること。後半では、自身が教員養成を中心にしながらも、幼児から高齢者までを対象に半世紀にわたって指導し踊り続けてきた中で、大事にした身体性や表現性について述べる。

自己紹介：静岡産業大学教授、横浜国立大学名誉教授。専門分野は舞踊教育学、臨床教育学

【略歴】山形市出身。東京教育大学大学院体育学研究科修了。舞踊教育学を松本千代栄や川口千代に、モダンダンスを正田千鶴に学ぶ。横浜国立大学（1981～2018年：その間、附属鎌倉小学校校長兼任）や静岡産業大学（2018～、現在スポーツ科学部長）で、舞踊や体育を学術面から紹介し後進育成に尽力。（公社）日本女子体育連盟初代会長、日本体育学会副会長、文科省学習指導要領解説作成協力者（2008・2017年度）を歴任し、からだ気づき教育研究会を主宰し、年に一度はダンスの舞台に立つ。

【著作】『からだ：気づき学びの人間学』晃洋書房 2004、『表現』不味堂出版 1995 他

【研究内容：科研】「学校ダンスの即興の縦断的横断的研究をふまえた指導法開発：松本千代栄の遺産と再生(2024-27)」 「健康持続の「からだ気づき」のレジリエンスプログラムの開発(2018-22)」

吉田美和子（上智大学）

Minako Yoshida

身体(body)が動き、からだ(soma)がダンスする：ソマティクスの身体観とダンス教育
“The Body Moves, the Soma Dances:
The Meaning of the Body in Somatics and Dance Education”

身体をどのように感受し捉えるかという身体観が、最も直接的に反映される場がダンスであり、ダンス教育である。その身体観は、基礎的なトレーニングから舞台上で表現される作品に至る全てのプロセスの基盤となり、インストラクションの言語選択や評価方法に影響を与え、ダンスを通して自他の身体とどのように関わり、何を学ぶのかという根本的な問いにつながっていく。

日米のダンス教育を身体性の観点から比較するとき、顕著な相違点としてソマティクスの実践が挙げられる。米国では多様なソマティック・アプローチが、動きの再教育や身心のつながりを探求する実践としてダンス教育に導入されているが、日本では単なる身体の解剖学的知識と運動機能(motor)の学習として捉えられ、ダンス教育における実践は極めて限定的である。一方、米国では、ソマティクスの実践はダイナミックな動きやダンス表現とは切り離された、フロアに横たわり内省的に探求する感覚的(sensory)な学習として捉えられがちであり、その位置づけについて葛藤と模索が続いている(Wozny, 2010)。

こうした議論の背景には、ソマティクス本来の身体観とその成立の文化的・歴史的な脈が吟味されないうまま、身体の効率的な動きや機能の拡大といったワークの一面のみがダンス教育に合目的に導入されてきた経緯がある。元来ソマティクスは、物質としての「身体(Body)」を客観的に捉えるだけでなく、身体、心、スピリチュアリティを含む総体としての「からだ(soma)」を主観的に捉える現象学的な学問領域であると同時に、全人的なワーク(work for whole person)でもある。その意味でソマティクスの思想と実践は、「ダンス教育はどのような身体を、そして人間を涵養しようとしているのか」という問いに重要な示唆を与えるだろう。

本シンポジウムでは、日米のダンス教育における身体性を、ソマティクスの身体観との関係から批判的に検討することによって、それらが目指す「ダンスの身体」を文化的・歴史的な身体観の系譜に繋げながら、今後のダンス教育の可能性を探求する。

自己紹介

上智大学基盤教育センター身体知領域教授。専門はソマティック教育学。ボディ-マインド・センタリング公認教師(Certified Teacher of Body-Mind Centering®)。2014年より、初年次の必修科目「身体のリベラルアーツ」をはじめ、「ソマティック教育入門」「身体知演習ボディワーク」「知としての身体を考える」「宗教と身体性」を担当。ソマティクス関係者や他領域の研究者と共に、「からだ(soma)」の直接経験に基づく学びを次世代教育のメインストリームとすべく、その可能性を探求している。